

令和 2 年 5 月 17 日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12181

研究課題名(和文)分娩介助における安全管理教育モデルの具現化：アウトカム指標の開発

研究課題名(英文) Toward the Establishment of an Education Model for Safety Management in Skilled Birth Attendance: Development of an Outcome Scale

研究代表者

岩谷 久美子 (Iwatani, Kumiko)

滋賀県立大学・人間看護学部・教授

研究者番号：10435331

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：分娩介助における安全管理教育モデルの具現化をはかるためにアウトカム指標を開発した。75施設の助産師学生506人に質問紙調査を実施した。スケールは40項目5因子抽出され、【ハイリスクな分娩経過に伴う医療安全行動】【チームによる医療安全行動】【異常発生時の対応と予防的行動】【ローリスクな分娩経過に伴う医療安全行動】【専門職としての医療安全行動】と命名した。スケールの内的一貫性は、項目全体ではCronbachの係数が0.94であった。すべての因子間に共分散を仮定したモデルで分析したところ、適合度指標は、GFI=.806, AGFI=.783, RMSEA=.063, AIC=2395.930であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

助産師教育担当者と臨床における指導者の両者の能力期待の分析の基に、分娩介助の安全管理能力測定のアウトカム指標が明確になることは、学生にとって安全管理能力レベルや自己の課題が明確になり、教育側と臨床側にとっても安全管理修得に向けた統一的な指導アプローチの実現につながる。確実な分娩時の安全管理能力が獲得できれば、事故を起こさないか不安という新人助産師の医療事故防止や離職の減少にも貢献できる。また、本研究の結果は、助産師の実践能力習熟段階(クリニカルラダー)と学生の分娩介助の安全管理能力との整合性を考察する上で基礎的資料として活用できる。

研究成果の概要(英文)：To establish an education model for safety management in skilled birth attendance, an outcome scale was developed, and its reliability and validity were confirmed. The main study was a questionnaire survey using external criterion measures, involving 506 midwifery students belonging to 75 facilities. Through exploratory and confirmatory factor analyses, 40 items of 5 factors were selected for the scale, which were named: [medical safety-related behaviors adopted in the course of high-risk deliveries], [medical safety-related team behaviors], [the management of abnormalities and preventive behaviors against them], [medical safety-related behaviors adopted in the course of low-risk deliveries], and [medical safety-related behaviors adopted as a professional]. Cronbach's α , representing the scale's internal consistency, was 0.94.

研究分野：助産学

キーワード：分娩介助 安全管理 教育モデル アウトカム 助産師学生

1. 研究開始当初の背景

日本の産科医療分野では、過酷な労働環境や医事紛争が多いことなどの状況から、2009年から産科医療補償制度の運用が開始され、国民としても安全管理に注目が高まり、産む側の妊婦も、分娩施設選びに安全基準が重要な要素を占めている。特に分娩期は、緊急時の対応の遅れが重大な事態へと発展してしまう場合がある。しかし助産師教育は、指定規則上、分娩介助10例程度は、実際に学生が分娩介助を実施することから教育内容としても大きな位置を占めるが、助産学生のインシデント・アクシデントの発生場所は、「分娩」が最も多く、自律に至っていない現状にある。また新卒看護職員は、「医療事故を起こさないか不安」という理由で、常勤の離職率は10.9%で横ばいが続いており、その要因は基礎教育終了時点の能力と看護現場で求められる能力とのギャップ、看護職員に高い能力が求められるようになってきていることが挙げられている¹⁾。

研究動向をみると、国外の論文では、助産師学生に焦点を当てた分娩介助の安全管理に関する文献は見当たらず、多くは、臨床助産師の自宅出産のリスクや患者の安全性等であり、本邦でも、安全管理の研究は、事故事例の分析等、臨床助産師に焦点が当てられている。学生にとって分娩介助は、母児双方の安全という面において緊張を強いられ、焦りや注意力不足、現実的イメージ不足によることがインシデントの要因とされている。また、新人助産師は、分娩の異常の理解と対処行動を伴う安全行動は自信がなく、学生時代の実習で学びたい内容としている。助産師として国家資格を得た以上、正常分娩のプロフェッショナルとして自律した助産師であってほしい。そのためには、安全管理能力の到達を、どこまで卒業時に求めるのか、早急に取り組むべき課題であると考えられる。

2. 研究の目的

助産学生の安全な分娩介助の自律のために進めてきた分娩介助の安全管理教育モデルを具現化し、実用可能なものとし、分娩介助の安全管理能力向上支援に関連する教育としての使用を念頭に置き、インシデント内容を踏まえた教育・臨床の一貫した分娩介助における安全管理能力を測定するアウトカム指標を開発することが目的である。

3. 研究の方法

(1)用語の操作的定義

分娩介助の安全管理：分娩開始から児娩出後2時間までの母体と胎児に対して助産師がもつべき知識、技術、態度から安全に行動できることであり、リスクを予測し予防行動が実践できることをいう。なお災害時の安全管理の視点は省く。

アウトカム：分娩介助の安全管理において達成すべき指標とする。

倫理的感応力：対象の行為や言動の意味を心に感じ、倫理的に応答する能力のことである。

教育モデル：分娩介助において、助産学生が、安全に助産ケアを修得するためのコースアウトカムを設定した教育内容の図説したものである。4つの目標、すなわち①医療事故防止行動、②感染防止、③倫理的態度、④チーム行動を設定したモデルである。

(2)研究方法

次の①-③のプロセスを経た。

①ツールの作成

国内外の文献検討とともに、教育者側と臨床側に分娩介助の安全管理に必要な不可欠な内容について助産学教員・臨床助産指導者各々10名ずつフォーカス・グループインタビューを実施した。次に再調査として2回目は1回目の分析結果を開示し郵送法にて内容の妥当性を調査した。

分析は、インタビュー内容の逐語録を作成し、質的記述の方法でカテゴリー化を図り、分娩介助における安全管理能力を測定する(以下、SMBA[Safety Management Birth Attendance]スケール、とする)質問紙を作成し、専門家による専門的知識の提供を受け設問形式の設定、討議を経て質問紙を作成した。

②パイロットスタディ

(対象) 192施設の新卒～就業3年未満の助産業務を遂行している助産師(各施設2-5名程)へ作成したSMBAスケールを用いて調査した。施設は日本全国の分娩件数ランキングを参考に分娩件数550件/年以上の産科施設へ郵送した。また調査対象者に対し、再調査の同意が得られた助産師に同様の質問紙調査を実施した。

(調査時期) 2017年7月21日から1か月間および再調査は10月の1か月間であった。

(調査内容) 調査項目は、対象者の属性と「SMBAスケール」暫定版とした。項目は4段階リカートとし、4: 自律的、能動的、自主的、にできる、～に私は該当する、3: 依存的、受動的、他律的、助言を受ける、ことができる、～に私は該当する、2: 上記2,3以外であり、聞いたことはあるができない、わからない、～に私は該当する、1: 上記1～3以外であり、考えたことがない、経験したことがない、ので私は回答できない、とした。

(分析) 再テスト法により、相関係数とPolit & Beck/近藤(2004/2010)²⁾の合意率50～70%以下の項目について削除を検討した。

③『SMBA スケール ver. 1』の開発

(対象) 全国の 191 助産師教育施設の助産師学生 (1 施設 5-30 名程) とした。

(調査時期) 2017 年 11 月 20 日から 1 か月間であった。

(調査内容) 「SMBA スケール暫定版」「看護学生リスク感性測定尺度」「マスター尺度」の質問紙調査を実施した。対象者の属性と、SMBA スケール暫定版は 4 段階リカート (4: 自律的, 能動的, 自主的, にできる, ~に私は該当する, 3: 依存的, 受動的, 他律的, 助言を受ける, ことができる, ~に私は該当する, 2: 上記 2, 3 以外であり, 聞いたことはあるができない, わからない, ~に私は該当する, 1: 上記 1~3 以外であり, 考えたことがない, 経験したことがない, ので私は回答できない) とした。「看護学生リスク感性測定尺度」は, 25 項目 6 段階リカートで, 6: 非常に当てはまる, 5: まあまあ当てはまる, 4: 少し当てはまる, 3: あまり当てはまらない, 2: ほとんど当てはまらない, 1: 全く当てはまらない, とした。「マスター尺度」は 7 項目 4 段階リカートで, 4: 非常に当てはまる, 3: やや当てはまる, 2: あまり当てはまらない, 1: 全く当てはまらない, とした。

(分析) 統計ソフトは, SPSS. Vol. 22. 0 を使用し, 記述統計を行い, 外部基準尺度との相関係数を算出した。また内容一貫性の検討は Cronbach の α 係数を算出し, 基準関連妥当性は, 南他(2015)³⁾による「看護学生リスク感性測定尺度」と Pearlin & Carmi(1978)⁴⁾の「マスター尺度」との Spearman の相関係数を算出した。有意水準 5%以下を有意とした。モデルの適合度は SPSS. Amos. Vol. 22. 0 を使用した。

④倫理的配慮

A 大学医学研究倫理審査委員会 (審査番号 204) の承認を得た。

4. 研究成果

(1) 成果

研究方法①について

助産学教員・臨床助産指導者各々 10 名ずつの質的調査結果により, 分娩介助の安全管理に必要不可欠な内容を学生サイド, 指導者・教員サイド, 教員サイドの 3 つの側面に分類した。学生サイドの内容は, 「分娩介助技術が修得できている」「基礎的な知識を備えている」「感染防止行動ができる」「判断・予測する能力を備えている」「ヒヤリハットを活用できる」「チームの一員として行動できる」「報告・連絡・相談ができる」等 12 カテゴリーが抽出された。指導者・教員サイドの内容は, 「安全な分娩介助ができる」「指導者としての能力を備えている」「指導方法を工夫している」「安全管理について段階的に評価する」「施設に応じた安全管理を行う」等 7 カテゴリーであり, 教員サイドとして「調整役を果たすことができる」「学生の健康に気配りができる」のカテゴリーが抽出された。研究目的を達成するには学生をとりまく教育環境にも焦点を当てる必要があり, スケール開発につながる重要な結果であった。

その結果をもとに SMBA スケールの質問紙の内容や重複・表現, 質問項目の理解しやすさ, フォーマットの見易さなど研究者が直接意見を聴取し, その意見をもとに修正・検討した結果, 1. 医療事故防止・安全管理行動について, 2. 感染防止行動について, 3. 倫理的態度 (情報管理含む) について, 4. 安全管理・安全確保のチーム行動について, の 4 側面からなる 73 項目のツール (SMBA スケール) を作成した。

研究方法②について

パイロットスタディとして, SMBA スケールの質問紙を郵送した。有効回答は, 55 施設の助産師 106 名で, その内再調査の同意が得られた 66 名に再調査し, 37 名の有効回答が得られた。37 名の平均年齢は 26.5 \pm 5.4 歳で, 大卒が 28 名で, 総合病院勤務が 19 名であった。SMBA スケールの 1 回目と 2 回目の相関係数は 0.839 と 1%水準で有意であり, 高い相関がみられた。調査項目毎に分析した結果, 「できない・経験がない」に該当する 30%以上の項目は, 「医療紛争の解決」や「法的責任」「骨盤出口部拡大体位」「新生児蘇生」「骨盤位分娩」「急速遂娩時の介補」の 6 項目であった。しかし日本の助産師教育のミニマム・リクワイアメントとしての項目であり, 項目から外すのは妥当ではないと判断し 73 項目のまま本調査を実施することにした。自由記述では, 項目数が多いという意見のみであった。73 項目の「SMBA スケール暫定版」とした。

研究方法③について

全国の 191 助産師教育施設の内, 75 施設の助産師学生から回答が得られ, 有効回答は 506 名 (1 項目の欠損データがあった 5 名は平均値をあてた) であった。年齢は, 平均 24.5 \pm 4.85 歳で, 20-24 歳が 73.7%であった。助産師教育は, 専門学校 45.7%, 大学 23.7%であった。助産師教育前の就業の有無は, 無しが 75%であった。質問紙の分娩介助経験数は, 9-10 例が 76.5%を占めていた。

「SMBA スケール暫定版」の質問紙 73 項目の記述統計量を算出し, 天井・床効果, 得点分布の偏りの有無, 項目間の相関関係 ($r=0.8$ 以上) を確認し, 32 項目を除外した。41 項目を主成分分析 Promax 法による因子分析を固有値 1 以上で実施した。因子のスクリープロットで第 5 因子と第 6 因子までの傾きが大きく, 第 6 因子以降の傾きが小さくなっているため第 5 因子構造と仮定し

て再度因子分析を行った。因子負荷量が.350以下の1項目を削除し、3回目の因子分析を行った。なお、回転前の5因子で40項目の全分散を説明する割合は52.13%であった。この40項目を『SMBA スケール ver. 1』とした。第1因子は、「骨盤位分娩の介助」「子癇発作」「搬送の必要性」「会陰切開の介補」「クリステル胎児圧出法」「急速遂娩出」「新生児蘇生」「出血時の対応」の8項目で構成され、【ハイリスクな分娩経過に伴う医療安全行動】と命名した。第2因子は、「チームでの対応策」「チーム体制の調整」「インシデント・アクシデント原因分析」「手助けできる準備」「医療事故発生時の対応」「ヒヤリハットの活用」「自己の安全管理能力の把握」「情報管理体制の説明」の8項目で構成され、【チームによる医療安全行動】と命名した。第3因子は、「医療機器・器具の取り扱い」「異常発生時の判断」「予防策がとれる」「突発性のある経過の理解」「異常発生時の判断と介入」「順調な経過の維持」「分娩誘発の知識」「優先順位の判断」「予防的行動」「骨盤出口部拡大体位」「緊急備品確認」の11項目で構成され、【異常発生時の対応と予防的行動】と命名した。第4因子は、「経腔分娩の介助」「分娩進行状態の診断」「母児の健康状態診断」「分娩想起」「早期接触」の5項目で構成され、【ローリスクな分娩経過に伴う医療安全行動】と命名した。第5因子は、「法的責任」「医療紛争」「危機管理の必要性の理解」「安全対策マニュアル」「医療安全体制の把握」「施設の感染管理体制」「産科医療保障制度の説明」「看護職賠償責任保険制度」の8項目で構成され、【専門職としての医療安全行動】と命名した。

『SMBA スケール ver. 1』の内的一貫性は、項目全体では Cronbach の α 係数が、0.94、各因子では、第1因子から順に 0.86, 0.85, 0.86, 0.86, 0.83 であった。スケール全体ならびに各下位因子の各項目が削除された場合の α 係数がそれぞれの α 係数より著しく大きくなる項目はなかった。また、スケール全体の I-T 相関はすべての項目で 0.47 以上を示していた。

探索的因子分析の結果から5因子によって構成されていると仮定して、潜在変数として各因子を想定した。5因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、すべての因子間に共分散を仮定したモデルを想定し分析した。モデルの適合度指標は、GFI=.806, AGFI=.783, RMSEA=.063, AIC=2395.930 であった。『SMBA スケール ver. 1』の妥当性の検討として、外部基準尺度との相関係数を検討した。「看護学生リスク感性測定尺度」との相関は5つの下位尺度はかなり相関がある～やや弱い正の相関があった ($r=0.25\sim 0.46, P<0.01$)。「マスタリー尺度」との相関は、やや相関がある～相関はみられなかった ($r=0.19, P<0.01$) (Table 1)。

Table1 分娩介助における安全管理の尺度 (SMBA スケール ver. 1) と外部基準尺度との相関係数

外部基準尺度	分娩介助における安全管理の下位尺度						平均 (\pm SD)
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	尺度全体
	平均 (\pm SD)	2.18 (\pm 0.50)	3.00 (\pm 0.57)	3.00(\pm 0.40)	3.28(\pm 0.43)	2.69(\pm 0.49)	2.82(\pm 0.37)
安全行動遂行力	4.86(\pm 0.67)	.145**	.345**	.421**	.346**	.343**	.409**
リスク体験活用力	4.43(\pm 0.94)	.213**	.433**	.315**	.223**	.389**	.419**
看護学生リスク感性尺度	3.97(\pm 1.01)	.148**	.218**	.194**	.151**	.226**	.250**
リスク回避準備力	3.94(\pm 0.99)	.245**	.440**	.342**	.236**	.373**	.464**
リスク対応準備力	4.09(\pm 0.85)	.265**	.349**	.296**	.211**	.258**	.399**
リスク察知観察力	4.27(\pm 0.76)	.169**	.362**	.374**	.288**	.285**	.414**
マスタリー尺度	2.95(\pm 0.41)	.009	.154**	.234**	.219**	.124**	.189**

Spearmanの相関係数を示す。

**：相関係数は1%水準で有意(両側)です。

(2) 考察

スケールの信頼性については、一般に信頼性係数が、0.80以上の値が望ましい⁵⁾。『SMBA スケール ver. 1』項目全体では Cronbach の α 係数が、0.94、各因子では、第1因子から第5因子は順に 0.86, 0.85, 0.86, 0.86, 0.83 であった。また、スケール全体の I-T 相関はすべての項目で 0.47 以上を示していたことから内的整合性は保たれていると考える。探索的因子分析により得られた5因子は、因子負荷量が.390以上であり、それぞれ【ハイリスクな分娩経過に伴う医療安全行動】【チームによる医療安全行動】【異常発生時の対応と予防的行動】【ローリスクな分娩経過に伴う医療安全行動】【専門職としての医療安全行動】と命名した。最終的に40項目となったが、回答者の負担を軽減するためには、できるだけ質問項目数は少ないことが望ましい。今後はより少ない項目数で多様な側面を測定できるスケールとなるようさらに検討が必要である。他方、助産師

教育の安全管理に関するテキストの記述内容を分析し、さらなる強化の必要性として、医療事故時の対応、法的責任の理解、危険予測、チーム医療等もあげられており⁶⁾、今回の因子名抽出においても必要な内容の共通性があり、スケールとして重要な結果であったと考えられる。

確認的因子分析によるモデルの適合度指標では、GFI・AGFI共に1に近いほど説明力のあるモデルといえるが⁵⁾、結果はGFI=.806, AGFI=.783であり、あてはまりが良いモデルとは言い難い結果であり、今後さらなる検討が必要である。

助産師学生の『SMBA スケール ver. 1』と看護学生リスク感性尺度の全体項目は、かなりの相関がある～やや弱い相関あるという結果であった。つまり『SMBA スケール ver. 1』が、リスクに対する考え方・行動内容を考慮した尺度として作成した妥当な結果であり、類似した概念であったと評価できる。しかしマスタリー尺度と『SMBA スケール ver. 1』全体はほとんど相関がみられなかったという結果であり、マスタリーの項目内容は、例えば「自分の力で変える」「自分でコントロールできる」など、個別性や自律性を重んじている尺度であり、個人の力で問題を解決するという要素が強い尺度である。『SMBA スケール ver. 1』は、個人の力で問題を解決するという面と、報告・連絡・相談という他者との協力・連携という社会性も重要な内容であるといった面がある。そのため今後においては、外部基準尺度の適切性についても検討する必要がある。

(3)今後の課題

本研究で開発した『SMBA スケール ver. 1』は、73項目から40項目と精選され、一定の信頼性と妥当性が得られた。しかしモデルの適合度と外部基準尺度すなわち基準関連妥当性はまだ十分とは言えず改善の余地がある。

<引用文献>

- 1)内野恵子, 島田涼子: 本邦における新人看護師の 離職についての文献研究, 心身健康科学, Vol.11, No.1, pp18-23, 2015
- 2)Polit, DF & Beck, CT. /近藤潤子監訳(2010). 看護研究: 原理と方法第2版, 医学書院, 東京, 2004
- 3)南妙子, 田村綾子, 市原多香子: 看護学生のリスク感性測定尺度の開発と信頼性・妥当性の検討, 日本看護学教育学会誌, Vol 24, No. 3, pp13-25, 2015
- 4)Pearlin LI, Carmi S: The structure of coping, J. Health Soc. Behav., Vol 19, No.1, pp2-21, 1978
- 5)小塩真司: 第3版 SPSS と Amos による心理・調査データ解析, 東京図書, 東京, 2018
- 6)Kumiko Iwatani, Keiko Shimada: Content analysis of safety management in Japanese midwifery educational textbooks, Journal of Society of Nursing Practice, 30(1), 18-31, 2017

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Kumiko Iwatani	4. 巻 17
2. 論文標題 Contents Analysis of Safety Management-related Syllabi for Midwifery Education	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間看護学研究	6. 最初と最後の頁 57-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kumiko Iwatani, Keiko Shimada	4. 巻 30(1)
2. 論文標題 Content analysis of safety management in Japanese midwifery educational textbooks	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Society of Nursing Practice	6. 最初と最後の頁 18-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kumiko Iwatani, Keiko Shimada	4. 巻 40(1)
2. 論文標題 A descriptive study of student incident characteristics during birth assistance	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 J Tsuruma Health Sci Soc, Kanazawa University	6. 最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 岩谷久美子
2. 発表標題 再テスト法による分娩介助の安全管理能力に関するツール作成の試み
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kumiko Iwatani, Kyoko Kanamori, Kaoru monya
2. 発表標題 Usefulness of an Educational Model for Safety Management in Skilled Birth Attendance during Midwifery Training
3. 学会等名 International Association of Risk Management in Medicine (IARMM) 7th World Congress of Clinical Safety (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kumiko Iwatani, Kyoko Kanamori, Satomi Yoshida, Miwa Izuhara
2. 発表標題 Safety management requirements necessary for skilled birth attendance provided by midwifery students, based on the perspective of training instructors
3. 学会等名 International Association of Risk Management in Medicine (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩谷久美子, 山崎智里
2. 発表標題 e-syllabus・達成式テスト配信システムによる助産学生の安全管理教育プログラムの学習効果と課題 (第2報)
3. 学会等名 第58回日本母性衛生学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kumiko Iwatani, Miwa Izuhara, Satomi Yoshida and Kyoko Kanamori
2. 発表標題 Roles of clinical supervisors to be fulfilled to teach students safety management skills for birth assistance
3. 学会等名 TNMC & WANS International Nursing Research Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩谷久美子, 山崎智里
2. 発表標題 e-syllabusシステムと達成式テスト配信システムを活用した助産学生に対する医療事故予防教育プログラム 第1報
3. 学会等名 第31回日本助産学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kumiko Iwatani, Keiko Shimada, Kyoko Kanamori, Miwa Izuohara, Satomi Yoshida
2. 発表標題 Analysis of the causes and strategies for preventing incidents occurring during skilled birth attendant training using an RCA approach
3. 学会等名 The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kumiko Iwatani, Mariko Fujihira
2. 発表標題 The association of safety management skills in birth assistance with risk sensitivity and mastery
3. 学会等名 International Association of Risk Management in Medicine(IARMM) 8th World Congress of Clinical Safety 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	島田 啓子 (SHIMADA Keiko) (60115243)	金沢大学・女性発達看護学・助産学・教授 (13301)	